

Views from Orienteering

村越 真

西伊豆防災ワークショップ

社会人向けに大学で開かれている防災研修で教えた西伊豆の防災ボランティアの方から、同地での防災ワークショップの依頼を受けた。僕が忙しいのを重々承知の彼女は、「避難経路マップづくりをすることで、一人でも多くの人の命を救いたい」という殺し文句を用意していた。地図が人の命を救う可能性があるなら、断れないね。

前泊して、西伊豆でのんびり温泉に入っておいしいもの食べてリフレッシュ。仕事の忙しさにくじけそうになる自分に言い聞かせて出かけることにした。清水から土肥まで駿河湾フェリーで渡れば、そんなに遠くない。ついでに、自転車でいけば、フェリー代も安いし、トレーニングにもなって一石二鳥だ。清水から伊豆半島にフェリーで渡って自転車をこぐというのは前からやってみたかった輪行プランなのだ。

ワークショップは1月下旬。当日のフェリーの予約をしようと思ってウェブサイトを見て気づいた。「船体保守のため定期運休」「なに～！」そうは言っても、沼津修善寺経由でドライブする気にもなれず、修善寺から約40km、船原峠を越えて自転車でいくことにした。たっぷりトレーニングが楽しめるぞ。

訪れたのは西伊豆町の田子地区、古くからの鰹漁で有名な漁師町だ。漁師町だから当然のように入江の奥に海拔ゼロmから住宅地が広がっている。かつて、入江の中の狭い土地に暮らしていた名残か、イタリヤの中世山岳都市を思わせるような迷路のような細街路が縦横に走っている。スプリント0やったら、とっても面白そう！ちょっと狭いが大縮尺の地図でフォトロゲイニングしても面白そう。

考えてみれば、この街でスプリント0やロゲイニングが楽しいということは、街の住民が津波に対して非常に脆弱な環境で暮らしていることの裏返しだ。地震があれば、この細街路は両側の建物が壊れたり、がれき落ちてきたりして、歩くことさえままならないかもしれない。どのルートが近道かもわかりにくいだろう。特に人口の50%近い高齢者にとっては、逃げようと思っても逃げられない環境なのだ。

ワークショップでは、高齢者にもできるだけ分かりやすい地図をと考えて、

赤色立体図の赤をグレースケールにして、それに細街路や建物を入れた大縮尺の地図を提供して、街歩きをした。普段歩くには楽しい街は、地震と津波の時、間違いなく修羅場になる。ワークショップを通じて、住民がその事を改めて強く意識してくれたことだけが唯一の救いであった。



中世山岳都市さえ思わせる細街路は、スプリントには格好の舞台。だがそれは津波に脆弱であることも意味する。



真剣に地図に向き合う参加者たち。このナビゲーションには命が懸かっている。

道迷いシンポジウム

1990年代に入って増加の一途をたどる山岳遭難の中で、道迷いはダントツの1位、40%を占めている。95%以上は軽微な遭難で無事救出されている。だが、それに投じられる社会的リソースは多大である。道迷いは遭難場所が特定できないことが多く、捜索には多大な労力が必要だからだ。山岳遭難減少の鍵は道迷い遭難の抑制にある、というのが登山界の一致した見解である。

道迷い遭難を科学的な視点から研究している関西大学の青山千彰先生に誘われて、共同で「道迷いシンポジウム」を3月14日に開催した。登山者・野外活動者、登山団体、研究者が一同に介して道迷いの実態から原因となる人間的要因、そして対応策までトータルに情報交換しようというのが、このシンポジウムの趣旨だった。最終的には発表者13人と聴講者が100人を越える大

イベントとなり、この問題に対する登山界の関心の高さを感じさせた。

(特に青山先生の)発表を聞いて思ったのは、一般的な登山者の現在地把握能力の驚くべき低さと、それに対する意識の低さである。青山先生の実験によれば、里山での実験では、スタート直後から現在地を取り違え、移動距離よりも大きな現在地把握の誤差を示し続けた被験者もいる。オリエンティアなら、大学生の初級者でさえどこかでおかしいと思うだろう。また道迷い遭難(警察による救助を受けた)の体験者の話しを聞くと、どうしてそんなに楽観的でいられるのだろうと疑問に感じざるを得ない。青山先生の実験に僕も被験者として参加したことがあるが、その時現在地把握の課題を与えられ、「コンパスを使っていいか?」と聞いたら、「ここでは使っても使わなくても成績に差がないので、使っても良い」と言われて、啞然としたことを思い出した。使っても使わなくても差がないのは、登山者が日本の地形におけるコンパスの使い方を分かっていないからだ、と思わざるをえない。

そこから感じたことは、道迷い遭難の多発に対応する時、単純に「地図が読めればよい」という話しではないことだ。登山におけるリスクに対する考え方、行程管理などの事前のプランニング、それら全てが問題なのだ。地図を使って、登山の最中に遭遇する、リスクから自らを守るという目的に向けて地図をどう使うかが問われている。登山者やアウトドア活動者に向けて読図講習を提供することへの関心はオリエンテリング界でも少しずつ高まっているが、この点への理解が重要なポイントとなるだろう。



道迷いの防止は山岳遭難の世界でも大きな課題となっている。会場には研究者から登山団体関係者、登山者まで多様な人が集まった。オリエンテリング関係者もちらほら。

(村越 真)